

3年選択日本史A 平塚らいてうを読む

—— ジェンダーフリーについて考える ——

玉谷直子

1. 公開授業の目的

3年生の選択日本史A（1単位）では、2年次の学習で読むことができなかった近現代史の史料の読み込みと古代から近代までの文化史を扱っている。授業においては、史料を読む際にも、文化史を学ぶ際にも、その背景となる時代の社会や国際政治の構造、状況を理解させることを重視している。今回は、第一次世界大戦後の社会運動興隆の時代に、平塚らいてうらが婦人を「何」から「どのように」解放しようとしたのかを考えることを通して、明治期の日本で作り上げられたジェンダーを理解することをめざした。また、明治期の日本で形成されたジェンダーは現代のジェンダーとは異なっており、したがって、らいてうらが挑戦したジェンダーからの脱却の方法は、現代を生きる私たちが試みている方法とは異なっていた点にも気付かせることを試みた。

本校では、2003年度、2004年度の3年生、2004年度、2005年度、2006年度の2年生全員に、「元始女性は太陽であった。」という文章で始まる、『青鞥』創刊号に寄せた平塚らいてうの有名なエッセイへの感想を書かせ、さらに同級生の感想にコメントをつけるという取り組みを行ってきた¹⁾。今回はそれらの素材を利用して、らいてうの思想の新しさと問題点を知り、それぞれのジェンダーフリーに対する考えを深めていくことをめざした。

2. 授業の流れ

① 授業前の準備（2006年11月前半）

対象生徒の所属する学年の生徒全員が2年生の時に書いたらいてうのエッセイに対する感想を配布する。そして、それらの感想の中から、共感できるもの、共感できないものを選び、その理由も書くという宿題を課す。

② 一時間目（2006年11月17日：通常時間割における授業）

提出されたものをもとに、共感された感想、共感されなかった感想をピックアップしてプリントにし、配布する。それをもとに、どのような意見が共感されやすいのか、反発されやすいのかについてディスカッションを行う。そのディスカッションを通して、生徒たちの意見が対立する論点は、「ジェンダーフ

リーとはなにか」、「社会はどうあるべきなのか」ということであり、それぞれが異なる意見を持っていることに気付かせることができた。つまり、「らいてうの婦人解放に関する主張が女尊男卑につながる」という反発や、婦人を解放することの必要性を訴えた強さへの賞賛は、ともにそう主張する生徒のジェンダーフリーの思想とらいてうの思想との重なりやずれであることに意識を向けさせることができた。

③ 二時間目 (2006年11月18日：研究授業)

前日のディスカッションの論点や成果を整理したうえで、らいてうの生涯とその思想の展開について学んでいく²⁾。らいてうの生年を確認し、彼女の生きた時代の状況を復習する。らいてうの自伝を史料として、当時の良妻賢母教育や女性を家庭に閉じ込めることに対する彼女の反発を確認する。一方で、婦人解放運動家としてのらいてうの言説におけるキーワードが「母性」であることに気付かせる。また、同時代に活躍した女性たちとの論争、戦後の改正民法や日本国憲法24条に対するらいてうの意見を通して、らいてうの母性保護論について知るとともに、「婦人運動家」とひとくくりにされている人々の思想にはそれぞれ差異があることを知る。そこから、明治期に形成されたジェンダーの複雑さを読み取り、さらにそのジェンダーが解体された後に構築されてきたジェンダーの複雑さについても考えさせる。

3. 研究協議

参加者の間では、昨今の高校生にとっては、史料の読み取り以前に史料を読むこと自体がとても難しいことであるという問題を共有することができた。近世以前の史料はもちろん、近現代の史料であっても、漢字が読めない、熟語が理解できない等の困難があり、史料を読むことを敬遠する傾向がみられる。また、史料に慣れていない生徒に史料を読ませると時間がかかるが、限られた授業時間の中では十分に時間をとることができないという実状もある。しかし、史料の読み取りは日本史学習の重要な要素であるため、できるだけ積極的に授業で史料を扱い読む訓練を行うことが、考える力を育むためにも必要であるとの認識で一致した。

4. 授業および研究協議を終えて

今回の研究授業のために、らいてうの自伝やその他の多くの書籍を読み、授業で配布する資料を用意した。それはとても大変な作業ではあったが、非常に充実した楽しい時間を過ごすことができた。授業に参加した生徒も、熱心に参加していた。なかには、授業中に扱わなかった資料を読み、後日質問に来る生徒もいた。生徒の興味関心を喚起するには、十分な教材研究が必要であると再確認できたことは、私にとっては大きな収穫であった。

また、研究協議では、授業内容に関する協議だけではなく、参加者が教室で直面している課題や、史料を読む力の育成、知識の定着、歴史的思考力の涵養等の方法論についての意見交換を行うこともできた。参加者全員が積極的に発言する非常に有意義な会となり、私も大きな刺激を受けることができた。

注

- 1) 本校では、必修日本史Aを2000年度入学生までは3年次に開講していたが、2001年度入学生よりカリキュラムが変更され、必修日本史Aを2年次に開講するようになった。2003年度の3年生に対する実践については、玉谷直子「高校日本史におけるジェンダーフリー教育の課題を求めて～平塚雷鳥のエッセイをめぐる生徒の意見分析～」『研究紀要第51号』お茶の水女子大学附属高等学校（2003年）にて詳細な分析を報告した。その後の取り組みについては、今後報告したい。
- 2) 配布資料:授業用レジュメ、①小林登美枝編纂『元始、女性は太陽であった』大月書店国民文庫（1992）及び総合女性史研究会編『史料にみる日本女性のあゆみ』吉川弘文館（2000）より作成、②生徒たちのらいてうのエッセイに関する感想、③生徒達の感想に対する生徒たちの意見